

## ‘ししわかまる’の養分吸収特性に基づいた施肥技術の確立

農業試験場 主任研究員 橋本真穂

### 【要約】

‘ししわかまる’では、整枝栽培で窒素施用量を60kg/10a程度とし、緩効性肥料を用いて全量基肥施用、または有機質肥料を用いて基肥30kg+追肥30kg施用することで、収量や可販果率が向上し、‘葵ししとう’と同等の可販果収量が得られる。

### 【背景・ねらい】

和歌山県では、辛味果実が全く発生しない全国初のシシトウ品種である‘ししわかまる’を育成し普及に取り組んでいるが、慣行品種である‘葵ししとう’より収量が劣るため栽培管理技術の確立が望まれている。そこで、‘ししわかまる’の養分吸収特性について解明し、‘葵ししとう’と同等の可販果収量が得られる施肥技術の確立に取り組んだ。

### 【成果の内容・特徴】

1. ‘ししわかまる’栽培において、‘葵ししとう’（慣行窒素施用量 30kg/10a）と同等の可販果収量（秀優品収量として目標 5.5t/10a）を得るためには、施肥量を窒素 60kg/10a 程度とする必要がある（図 1）。
2. ‘ししわかまる’の養分吸収量は乾物生産量に比例して増加し、特に梅雨明け以降の夏季に多い（図 2）。
3. 窒素 60kg/10a を施用する場合、緩効性肥料ではスーパーIBS562 を全量基肥施用し、有機質肥料では基肥で 30kg/10a、梅雨明け後の 7 月下旬頃に追肥で 30kg/10a 施用する。いずれも施肥コストは葵ししとうに比べ増加するが粗収益が向上する（表 1）。

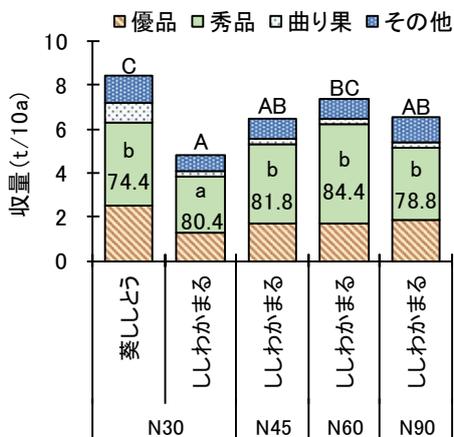


図1 シシトウの収量に及ぼす施肥量の影響

数字は全収量に対する可販果(秀品及び優品)の割合。異文字間(大文字は全収量、小文字は可販果収量)に5%水準で有意差有り(tukey法)。

ししわかまるは主枝4本・側枝3節摘心、葵ししとうは無整枝

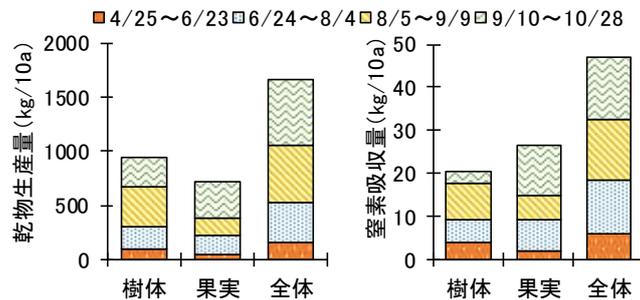


図2 ししわかまるの時期別地上部乾物生産量および窒素吸収量  
窒素施用量60kg/10a(液肥施用)で整枝栽培の場合。

表1 シシトウ栽培における肥料費と粗収益

		肥料費 <sup>x</sup> (円/10a)	粗収益 <sup>w</sup> (円/10a)
ししわかまる	スーパーIBS562	102,000	2,429,000
	有機質肥料 <sup>z</sup>	118,000	3,071,000
葵ししとう <sup>y</sup>		59,000	1,807,000

z: ありだ農協管内で流通している有機質肥料(8-7-6)を施用

y: 窒素30kg/10aをzで施用 x: 令和6年3月時点

w: 令和6年度場内試験の収量と令和5年度ありだ農協シシトウ単価より算出